



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第37号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2014年3月20日
 〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
 Phone 0561-62-4111 EX 2498
 FAX 0561-63-9308
 E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

Contents

- 第28回定例セミナー「少女マンガの男装キャラクターにみる女性身体と男装の関係性」報告… 1・2
- 学生感想文…………… 2・3
- 日進市主催 平成25年度男女平等啓発事業 メディア・リテラシー講座に参加して…………… 4
- 講座「性」をめぐる社会の問題」を聴講して…………… 4
- 個人的なこと…………… 5
- 自著紹介『Japanese Femininities (日本人の女らしさ)』…………… 6・7
- 第7回「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作」報告会…………… 7・8

2013年11月27日に第28回定例セミナー「少女マンガの男装キャラクターにみる女性身体と男装の関係性」を両キャンパスにおいて開催いたしました。以下はその概要です。

第28回 定例セミナー

少女マンガの男装キャラクターにみる 女性身体と男装の関係性

講師 押山 美知子さん
(専修大学非常勤講師)



押山美知子先生は少女マンガに登場する男装の少女の描かれ方をジェンダー表象の観点から研究されてきた。2009年におこなわれた本研究所主催の第22回定例セミナーでも「少女マンガにみるジェンダー—〈男装の少女〉はどのように描かれたのか—」のタイトルでご講演いただいている。今回、ご著書の『少女マンガ ジェンダー表象論』の増補版を上梓されたこともあり、書き加えられた近年のマンガ分析もまじえて女性身体と男装の関係性についてお話しくださった。

押山先生は、まず少女マンガにみられる男装キャラクターの変遷をおおまかに述べられた後、女性身体と男性身体はどのように異なる扱いを受けてきたかを説明するため、大塚英志『アトム の命題 手塚治虫と戦後まんがの主題』(角川書店、2009) からふたつの論点をとりあげた。大塚によると、手塚治虫は記号的身体としてのマンガのキャラクターに、血を流し傷つき死にゆく生身の身体を与えたことにより、戦後マンガの可能性を開いたという。さらに大塚は女性身体について手塚の『ロストワールド』のラストに登場する乳房を露出したあやめの身体が「性」を

伴った表現であるともいう。押山先生は、ここで大塚が男性である敷島博士の身体を「性」を伴った身体とみなしていないようにすることに注目され、マンガのキャラクターに生身の身体が与えられたのを機に女性身体と男性身体が「性的な身体」として描かれるか否かに差異がみられるようになったと述べられた。特徴的な例として『ロストワールド』のあやめと敷島博士の対照的な描かれ方をあげられた。男性によって従属的な「性的な身体」として表象されることで女性身体には性的客体化がおこる一方、男性キャラクターの男性身体は主体的に「性的な身体」になる能動的な存在として描かれていると説明された。

次に、男装キャラクターの「性的な身体」としての扱われ方を手塚の『リボンの騎士』に登場するサファイヤを例にあげて述べられた。サファイヤは男装した女性身体であるが男装はあくまで一時的な仮装にとどまっている。その身体の扱われ方が出版された版によっても異なっているとはいえサファイヤの本質は「性的な身体」である女性身体によって表象されるのである。少女誌メディアにおいてあからさまな「性的な身体」の描写が許されなかった1950



年代の「少女クラブ」版では偶然露出したサファイヤの足が女性身体としてフランツ王子に見られる対象となるなど「性的な身体」であることの暗示があった。

それが1960年代に出た「なかよし」版になると暗示にとどまらず乳房を露出したり女言葉を話したりするキャラクターとして描かれることによって女性身体が仮装の男性の下に隠された本質として表された。

一方、手塚とは異なり、団塊世代の少女マンガ家たちは男装キャラクターの女性身体を「性的な身体」として受け入れることが難しかったとも述べられた。1970年代に男装キャラクターにおこった変化を説明するため押山先生は再び大塚を参照された。「二十四年組」と呼ばれる昭和24年前後に生まれた女性マンガ家たちによって少女マンガに大きな変革をもたらされたとする大塚の見解では「記号的な身体表現を用いつつも生身の身体を描いていく」矛盾が「二十四年組」に引き継がれるにあたり「性的な身体」への拒否反応や違和感が表明されたという。押山先生は例として萩尾望都の『雪の子』をとりあげられた。少年として育てられたエミール・ブルクハルトは男装によってアイデンティティを確立していたため男の子として強い自己肯定感があった。この場合の男装キャラクターは性的欲望の対象となる「性的な身体」と結び付けられることはない。エミールが女装する場面では『リボンの騎士』のサファイヤ

の男装とは対照的にエミールの女装が仮装の意味合いをもつよう表象されている。エミールは第二性徴を前に仮装ではなく本格的に女性になっていく自分の身体から確固たるアイデンティティの崩壊を自覚し、結局のところ女性身体に成長する自分を受け入れられず13歳になる前に自らの命を絶つのである。

女性身体を容易に受容できない男装キャラクターはその後登場しているようである。押山先生は1990年代に描かれたさいとうちほ・ビーバスの『少女革命ウテナ』と2000年代に描かれた水城せとの『放課後保健室』に登場する男装キャラクターをとりあげ女性身体との関係性についてお話し下さった。ウテナにおいて女性身体は「性的な身体」が露わにされるものの自己確立を果たす主体、すなわち「旧来的な男性主体とも異なる男性性と女性性を融合した」あらたな主体が体现されているとのこと。また『放課後保健室』に登場する真白は上半身が男性で下半身が女性という存在。真白において「性的な身体」である女性身体は、みずから内面化するミソジニーによって、嫌悪や拒否の対象なのである。

以上のように、押山先生は女性身体と男装キャラクターの関係についてその変遷をわかりやすく説明された。最後に紹介された『放課後保健室』では女性身体への取り扱いが回避されていると指摘されたがボーイズラブ (BL) 作品にみられるように男性身体であっても主従の関係が表象される昨今の傾向を思えば今後少女マンガにおいて女性身体への取り扱いがどうなっていくのか興味深い。

(文責 IGWSスタッフ 石河 敦子)

学生感想文

近年の映画化やアニメ化などメディアミックスの印象は複雑である。良いとされる原作がメディアミックスの相乗効果を伴って関連品への経済効果を発揮しているのは事実としてあるかもしれないが、表現の質を考えた時に果たしてそれで良いのだろうか。メディアミックスによってなんらかの雑味が加えられ、原作が評価された当時の純粋な表現が失われているように思う。

最近では自分の周囲でも少年漫画を買って読んでいる若い女性をよく見かける。今回、セミナーを聴講して共感したのは、その状況に自分は何の疑問も持たないほどにそれは自然なことになってきているということ。女性にとっての少年漫画に対する抵抗がほぼ無くなってきている。その漫画の表現に魅了されるかされないか、結果その前者が購読しているという簡潔なこと。少年少女という枠はそこにはない。

実は私は失礼ながら少女漫画をあまり読まない。そういう者としてセミナーから感じたのは、前述した「女性が魅

了されるような純粋な表現」がメディアや時代などに左右され影響を受け入れすぎた表現への変容に対してもっと危惧すべきなのではないかということ。

そこにはさまざまな「大人の都合」が差し支えとなっているのかもしれないが、今回の出典で言うところの「性的な身体」をその漫画の表現の意図としている場合に、例えばその表現を弱めたり、粗雑な隠喩に変えたり、大胆に(?)なくしてしまったりしたような映画化作品などが多いように思われる。そういう作品に対しては興味を持たないという冷静な判断を下す女性たちも多いはず。きっとそういう女性はその漫画を「知っている」。

メディアミックスされたことによって漫画の良さが引き出せないのでは、その作品に対する真摯な向き合い方もなく、伝わる深みが薄まるだけである。結果、視聴者が満足することはない。視聴する側もそこを見極めた鑑賞をすることで、もっと深みのある味わい方ができるのではないだろうか。

(GCC研究科 前期課程院生 T・M)

本目 詩織

男性は主体として性的な身体になる。それに対し、女性は客体として性的な身体にされる。その性の非対称性のため、男装キャラは本質としての女性身体を受け入れて、性的な身体にされることを受容しなければいけなかった。たとえばリボンの騎士のサファイヤは男装をすることで性的な身体にされることを一時的に留保させたが、結局、男装の中に隠された本質としての女性身体をフランツに暴かれる。男装はあくまでも仮装で、暴かれた性的な身体にされる女性身体が本質として表現された。

押山先生のこのような説明から、サファイヤの描かれ方は男性優位性に基づいたものだと感じた。サファイヤの女性としての本質を暴いたのは男性であるフランツだ。男性であるフランツが主体となり、客体としてのサファイヤの本質である女性身体を探り当てた。ここに、女性は受動的であるように求められているのではないかと思った。

さらに、リボンの騎士は少女マンガである。多くの少女たちがこれを読んだのだろう。このサファイヤの姿を見て、

無意識のうちに、性的な身体にされることを学習してしまうだろうと思った。

リボンの騎士以降の「二十四年組」をはじめとする女性マンガ家たちが性的な身体を受容しなければならないことに違和感を持ち始めた。そして、性的な身体を受容する以外の男装キャラのあり方を、様々な形で描いた。その後の少女マンガについて押山先生は、このように説明された。

これは女性の生き方の可能性が広がったのではないかと私は思った。男性の性的欲望とされたい自分を自己肯定し、性的な身体にされない生き方をする男装キャラを見た少女たちが、性的な身体にされずに自らを主体にすることを選択肢のひとつとして考えることができるだろう。

少女革命ウテナの主人公であるウテナは、男性性と女性性を融合した新たな主体を確立した。このように男装キャラは、少女たちにあらゆる可能性を提示できるのだと思った。

(本学メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科2年)

石川 真衣

今回の講義では、マンガでの女性の男装についての歴史を学んだ。

私は、体は女性なのだが、時々男装をする。完全な男性になりたいわけではないのだが、女の子らしい恰好が好きではないから、男性とも同じ立場で交流したいから、ただ女の子にしか見られないのがいやだったからといった、「完全な女性で居たくない」という理由で男性っぽい服を着る。今まではそれだけしか考えていなかったのだが、講義を受けて、私の男装観は変わった。

そもそも、男装の目的にも色々あることに気づかされた。今回の講義で紹介された、『リボンの騎士』の主人公サファイヤや、『雪の子』のエミールなどは、男性でないと得られない自由や権利、男性でないと果たせない責務があるから、男装をしていた。『放課後保健室』の主人公は、私のように、女性に見られることが精神的に耐えがたいから男装をしていた。男装をしていることに変わりはなくとも、男装の目的はそれぞれなのだ。

そして、表現のややこしさについても気づかされた。自分が男装だと思う装いをすれば無条件に男性っぽく見られると思い込んでいたのだが、男装をするだけでは、男装に見られるとは限らないし、男性には見られない。他人からそれが男装だと認められなければ、男装にはならず、男性に見られるわけでもないのだ。まとめると、「自分が表現したいイメージ≠見る側が受けるイメージ」であり、「男装をする≠男性になる」ということだ。書いてみるとわかりきったことのように思えるが、本質的な理解はしていなかった。例えば、体が女性である私が男装をしても、男性に見られ

ることはあまりないとはわかっているけど、女装をすれば女性に見られることは当然だ、わかりきったことだと思い込んでいた。つまり、男装をすれば男性に見られるとは限らないように、女装をすれば女性に見られるとは限らないということを理解してなかったのだ。

例えば手塚治虫『ロストワールド』を引用しつつ押山先生が指摘された「女性は、男性の客体である」という考えは、受け入れ難くはあるが、事実のように感じる。私も、もしかしたら「女性=男性の客体、性的な欲望の対象」といったように見られることへの拒否感から男装をしているのかもしれない。女性だから客体にしか留まれないとは思いたくないので、だからと言って男装をするだけでは男性(主体)にもなれないので、どうしたら女性でも主体的な存在で在れるかを学んでみたいと思う。

(本学文学部国文学科1年)



日進市主催 平成25年度男女平等啓発事業 メディア・リテラシー講座 「送り手の思いvs受け手の事情」に参加して

間宮 浩貴

今年度も日進市主催「にっしんハーモニーフェスタ」(12月7日開催)にジェンダー研究会Coalookの学生たちが参加しました。出展準備を始める前に効果的なプレゼンテーション方法を学習する機会をもってくださいました。参加した学生の感想です。

10月12日の土曜日に上鶴瀬孝志さんを講師とした、日進市男女平等啓発事業メディア・リテラシー講座「送り手の思いvs受け手の事情」に参加しました。

この講座では、「受け手」の立場に立ったうえで、どのようにして必要な情報を伝えられる「送り手」となるかについて実践的に学びました。

まずは、普段目にするチラシや広告などに着眼し、「受け手」としてどのようなチラシが興味をひくものか、あるいはどのようなチラシがわかりづらいものであるのかを考えました。チラシの情報量が多すぎて理解しづらいものだったり、伝えたいことがよくわからないと「受け手」の記憶には残りません。「送り手」として情報を発信したとしても、「受け手」にとって興味をひかないものであったり頭に残らないものならば無駄に終わってしまいます。

次に、「送り手」として物事を伝えたい時には、どのようにして伝えたいかを3人～4人でのグループでの発表を通して学びました。そして、グループで話しあったことを発表し、どのような事を感じたか他のグループから意見を頂きました。そこでは、初めに話したことが強く印象

に残っているようでした。そのため、「送り手」として物事を伝えたい時には、大切なことを初めに伝える必要があると認識することができました。

最後に、「自転車事故を減らすために、あなたができること」をテーマにして各グループでプレゼンテーションを行いました。ここでは、最後に学んだ誰かに情報を伝えたいかを考えて発信するというターゲット・セグメントを生かし、各グループで学生や幼児の保護者などの対象者をそれぞれ設定し、模造紙に書いて発表を行いました。私のグループでは、自転車通学の学生をターゲットに考え、「スマートフォンよりも周りの景色をみて楽しもう！」というタイトルで、スマートフォンを見ながら運転するのを効果的に防げるにはどのように伝えるかを考え発表を行いました。

今回の講座に参加して、誰かにもものを伝えるときは「受け手」の思いや立場を考えながら物事を伝えていく必要があると感じました。そして、授業やサークル活動で伝えたいことを発表するときに受け手の気持ちを意識して考えられるようにしていきたいです。

(本学文学部教育学科2年)

「“性”をめぐる社会の問題」を聴講して

松田 彩伽

10月12日午後、日進市市役所で全4回連続講座「今、女性の“性”を考える」の第4回目が行われ、午前中のメディア・リテラシー講座に出席した学生が聴講しました。講師は、本学非常勤講師の中島美幸先生でした。

2013年10月12日、私は中島美幸先生の「“性”をめぐる社会の問題」の講義を受けた。オムニバス形式の講義で、主に歴史的な事象とジェンダーを照らし合わせて、性差に関する社会の問題とその背景について学んだ。そのなかでも印象に残ったのが、「男性が作った『女性イメージ』を生きてきた女性たち」の話だった。

19世紀以降の資本主義の急速な発展から、男性は商業競争のなか身を粉にして働き、その一方で女性はその男性を支える「魂の家政婦」としての役割を担わされてきた。つまり社会の中心に立ち働く男性の為に、女性はそれへの献身を望まれていた。そうして生まれた男性中心社会のイデオロギーは、現在でもあらゆる男女の不平等、男性優位・女性軽視な態度を制度や慣習に残している。

私はこの手の話を聞くと、それはあくまで昔の話であり、現在は改善されつつある状況なのだと、楽観視していた。「ちょっと大きめに言い過ぎなのではないか？」とも思うことが多かった。

しかし、中島先生はこうも話した。男性が自分たちの社会を築くために作った女性のイメージ、女性のストーリー

を、女性自身もそれに沿って生きている、と。そして「男性の作り出したストーリー」の内部にいる女性は、自分たちが男性によって作り出されたストーリーのなかに生きているのだということに気付けない。なかには、男性に依存することで社会的な進出や成功を望まない女性、つまりは男性が作った女性の「劣位」に、不満もなくそれに甘んじて生きる女性もいるほどだという。用語としてはシンデレラ・コンプレックスというらしい。厳密には違うかもしれないが、私もそういった「劣位」に甘えているところがあったのかもしれない。どうやら私も男性が作ったストーリーの中にいながら、それが現在でも地続きだと思っていなかったためにいまだに根強い男女差別があるなどという言葉にリアリティが持てていなかったようだ。

知識を得ることで、初めて思い込みの外側に立つことができる。私も講義を受けて初めて、自分をとらえていたもの(自分がとらわれていたこと)に気がついた。知ることや学ぶことは、つくづく大切だと思った。

(本学メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科4年)

個人的なこと

高橋 博子

個人的なことを原稿にするのは好きではないが、「個人的なことは政治的なこと」とケイト・ミレットが断言したように、私個人の思考や行動が、母からの伝授に依るところが大きいとすると、実はそれほど「個人的」といえることではないのかもしれない。少し振り返ってみることにした。

日本には女性たちが専業主婦に憧れた時代があった。戦後の復興期から高度経済成長へと飛躍的に発展しようとする昭和30年代において、結婚後も働きに出るのではなく、企業戦士としての夫を下支えするという専業主婦は、国家の目指す家族モデルの要員として重要なポストに昇格していた。今までと違って舅・姑の監視を離れて核家族を形成し、自分の思い通りの家事や子育てに専念できる専業主婦は、女性たちの憧れになったのだ。私の母もそんな専業主婦の一人だった。その幸せそうな母をモデルにして、私の未来像は、違和感なく形成されていったようだ。大学を出て就職し、3年後に結婚することになっても、私は仕事への未練よりも、母のように幸せになる、幸せになるには母のような生き方が正解だと疑わなかった気がする。そして私がそう思っていることを、何よりも母が喜んでいただよなのだ。しかし、現実に自分が妻や母になってみると、今まで見えなかった部分が見えてくるのも確かだ。

子育ては十分に楽しめた。毎日の子どもの成長やちょっとした変化を、子育て日記に記していくのは楽しみだった。それを夫と共有したいと思ったが、夫は「働き盛り」のお年頃だったので、そんな些細な楽しみに興じている時間はなく、夫にとって家庭は、ひたすら休息の場でしかなかった。一方私は、子どもの成長に伴い、PTA活動、子ども会などの行事に当然のように駆り出され、役割をこなし、忙しさを充実と勘違いしていることにも気付かずだった。「そつなくこなす」、これがその頃の私の基本だった。しかし子どもに手のかかる時期は意外に短く、彼らは勝手に成長し、様々な知恵や知識を獲得して関わる世界を広げていった。案の定、私自身は「そつなくこなす」だけで年を重ね、何かをやり遂げたような高揚感も得られず、何とも言いようのない焦りをじわりと感じ始めていた。母もこんな思いをしたのだろうか。母は、そんなことを私に語ることは一度もなかったが、「子どもの成長こそが、母の喜び」だったのかもしれないが、子どもは子どもであって、自分へのご褒美にはなり得ない。この閉塞感と焦燥感の混じり合った感情を持つことが、家族に振り回されて生きる女の宿命だと知るのは、もう少し先のことだった。

何かを始めてみるにしても、劇的な冒険には躊躇した。それは、「専業主婦の幸せ」という母からの洗礼を受けていたからかもしれない。しかし少しだけ何か自分のためにもしてみたいという思いから、時間の融通の効く塾を自宅に開くことを思いついた。当然そのための勉強も再開した。子どものため、夫のためではなく、家事の合間に作り出した自分のためだけに使う時間は、非常に貴重だった。また

久しぶりの「勉強」は、楽しかったのだ。そのうち欲も出て、図書館で開かれる絵本の翻訳サークルへも参加してみることにした。これは私にとって、子ども抜きで初めてつながる「社会」だった。

翻訳サークルで、私はさらに刺激をもらった。知りたい、学びたいという前のめりの衝動に駆りたてられたからだ。しかし知らないことを知る楽しみは、活動範囲が狭い分だけ限定的だ。私は自分の学ぶ場所を、翻訳サークルという社会から再び大学に求めた。

子どもが小学校の高学年になったこともあり、大学での聴講にある程度時間の融通ができたのも幸いした。なかでも「英米児童文学概論」は魅力的な講義で、「女性という視点」で作品を読むことに引きつけられていった。「女性という視点」を持つことは、娘であり妻であり母である立場で作品世界を眺めることであり、自ずと自分の娘時代、そして妻となり母となった今の自分を見つめなおすことにつながっていったからだ。講義で扱う作品を通して、今までの自分の経験が理論的に解説されると、あの時感じた言いようもない焦りの意味がストンと胸に落ちた。自分自身のことを知る手掛かりも、学ぶことで得られるのだと、視界が一気に広がった気がした。これは面白いと心底感じられるものを発見し、その喜びを感じていた。家庭とは別の場所に、ほんの少し関わるだけで、こんなにも自分が活き活きできるのだ。

そして大学院への進学を決意した。家族からは「お母さんの道楽」と言われたが、確かに何か習い事をするということと変わりはないと思った。フラワーアレンジメントを習いに行くのではなく、私は大学院へ行くことにしただけだ。それからは、研究と論文作成という猛烈な忙しさを経験することになったが、研究の合間に家事をすることがかえってメリハリになった。まさに充実した2年間を過ごし修士課程を修了した。そして今、当時は想像もつかないことだが、学生たちと向き合う日々を過ごしている。

今は専業主婦として過ごした日々を後悔しているわけではないし、回り道をしてきたとも思っていない。ただ母からの洗礼とは違って、外の社会に触れて意識や行動を変えてみるだけで、自分の幸せの質が変わったのだ。

誰しも過去を振り返り、少しだけ歩いていく方向を変えてみたいと思いつく時もある。その一歩を踏み出す勇氣より、一歩前へ踏み出してもいいのだと自分が思えるかどうかの方が、決定力になる気がする。そういう関係性を周りと構築しているかどうかとも重要だが、やはり自分が決めているのだと思えるかどうかだろう。

「個人的なこと」を書き綴り、わがままにやり通してきただけではないと言われてそうだが、自分の人生を生きていると思えることが、今はとても心地よい。

(本学非常勤講師)

ジャスティン・シャルボワ先生がこのたび上梓された自著 *Japanese Femininities* (Oxon; New York: Routledge, 2014) を紹介していただきました。

■ ■ ■ Japanese Femininities ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

I first came to Japan in 1998 as a university exchange student to study Japanese language and culture. As a result, I developed a desire to return to Japan after the completion of my undergraduate and graduate-level studies. My experience as an exchange student was a catalyst for my long-term interest in Japanese culture and gender.

After several years of professional experience, I entered a doctoral program in Applied Linguistics in the Department of Linguistics and English Language at Lancaster University in the United Kingdom. After receiving training in discourse analysis, I decided to study how a sample of Japanese women constructs gender through language as the topic for my doctoral thesis. A doctoral thesis is a 70,000 word research-based academic paper that makes an original contribution to a field of study. My academic discipline is gender and discourse analysis.

Japanese Femininities is based on my Ph.D. thesis and concerns how femininities are constructed in and through discourse; that is, discursively constructed. Discourse analysts view language as a resource that individuals utilize to actively create gender and other social identities that sustain, undermine, or even reformulate the norm. For example, an individual could construct a masculine or feminine gender identity through invoking a personal pronoun such as *watashi* or *boku*. Gender identity is not viewed as inherent and static, so men can construct feminine identities and women create masculine ones. As gender is never absolute, “masculine” and “feminine” are not discrete, immutable categories but always exist as points on a continuum. Consequently, individuals perform gender identities through language and other social practices.

While gender is constructed through language, it is also created through social practices that are situated in particular sociocultural settings. In order to comprehensively investigate my research topic, I reviewed sociological research about gender in Japan to complement my analysis. The results of this empirical research are that while the corporate salaryman and professional housewife exist as hegemonic archetypes of masculinity and femininity, social changes are gradually undermining the dominance of these enduring prototypes. Indeed, increasing numbers of women remain in the workforce after marriage and childbirth and thus define femininity outside the traditional family caregiver role. Likewise, many contemporary husbands are actively involved with housework and childcare and in the process redefine masculinity. In the data analysis phase of this research study, I considered how such social changes potentially impacted my participants’ discursive construction of femininities.

I would next like to comment on this study’s research methodology, findings and conclusions. This is a qualitative research study which means that I conducted an in-depth analysis on a relatively small sample of data. Unlike a quantitative research study, my goal was not to perform statistical analysis on large amounts of data in order to make claims that are representative of the larger Japanese population. In contrast, I conducted both individual and group interviews with a diverse sample of Japanese women. The sample was heterogeneous as it encompassed students, full-time homemakers, and both married and unmarried professional women. Supporting the empirical research surveyed, the results of the current study demonstrate how contemporary women resist traditional gender tropes and construct a kaleidoscope of alternative femininities that arguably undermine the status quo. For these women, the full-time female homemaker and male breadwinner no longer constitute the dominant paradigm of gender relations.

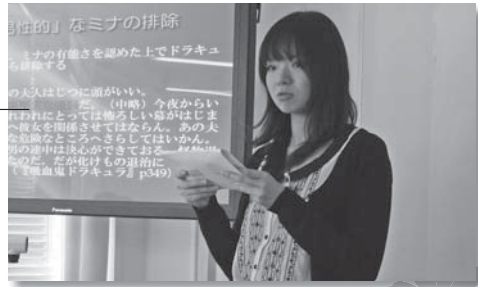
In conclusion, this book represents the finished product of a long journey and major milestone in my academic career. The results of academic research always reflect a particular research tradition, time, social setting, and researcher’s interpretations. Over the course of conducting my research, I made a conscious effort to actively listen to my research participants and foreground their voices. It is therefore my sincere hope that this study has contributed to informing and deepening our understanding of contemporary femininities in Japan and makes this knowledge accessible to readers both inside and outside Japan.



Justin Charlebois

(本学交流文化学部准教授)

『吸血鬼ドラキュラ』における男性性
 <文学部 英文学科> 西谷 友加



医療専門職に対するジェンダー・
 セクシュアリティ教育の必要性
 <健康医療科学部 医療貢献学科 言語聴覚学専攻>
 正木 健太



報告会の後は恒例の茶話会です。



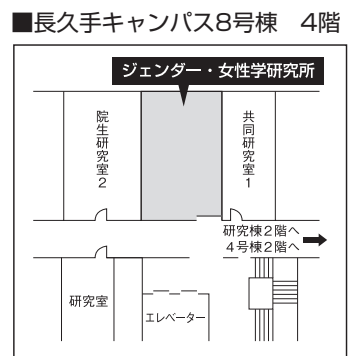
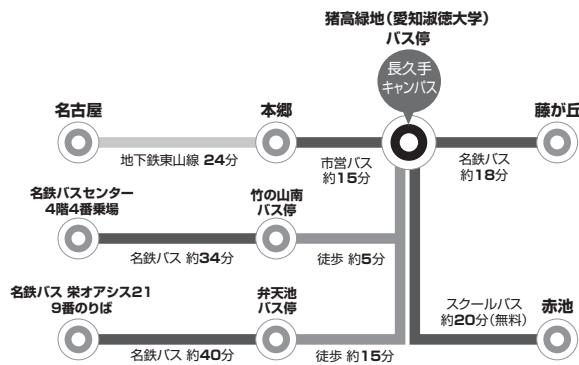
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です！

開室日 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

場所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階

案内図



編集後記

本号では、本学交流文化学部のシャルボワ先生が昨年出版された自著の紹介をしてくださっています。研究所に所蔵しておりますのでご利用ください。

さて、今年度は研究所開設から20年目の年でした（1994年4月開設、開所は1995年）。節目にあたり、この2月初めから3月初めにかけて増床工事が行われ、書架などの設備も一新されました。蔵書の収納場所に困ったり、利用者の増加で日によっては学生の座る場所がなかったり、ご不便をおかけしていたことを思えば、ぜひご利用いただきやすくなりました。4月には新しくなった研究所で新入生や春休み明けの学生たちを迎えます。（石河敦子）

ASU・IGWS2013年度

運営委員

酒井晶代(所長兼) 佐藤実芳 高橋伸子

建部貴弘 西 和久 平林美都子

福本明子 森井マスミ 米倉五郎

若松孝司

事務担当

石河敦子